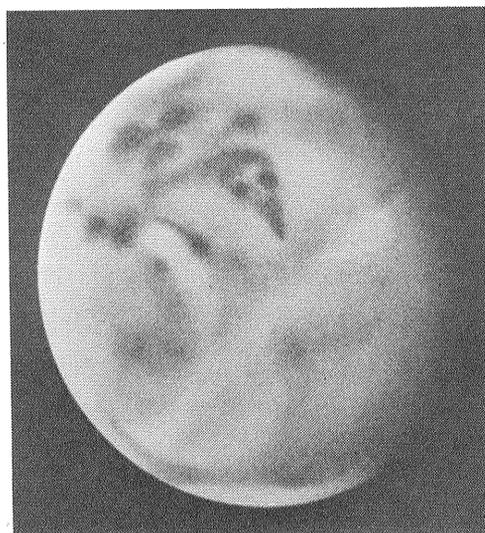


を送信してきた。こうして 太陽系の惑星のなぞが一つ一つとかれていきつつある。

ここでとくに興味をそそられるのは 月・水星・火星のそれぞれには おびただしいアパタ(クレーター)が存在し 地球型惑星の特異な共通性を示していることである。最近のアメリカのジェット推進研究所の発表によれば 精度の高いレーダー観測の結果 金星の表面にも たくさんの大きなクレーターがみつかった ということである。地球とても例外ではなく かつては同じような性質を示していたことであろう。

しかしまた いっぽうでは月・水星・火星などのそれぞれには それぞれの個性 固有性があることも確かである。惑星のこのような共通性(普遍性)と個性性をさぐるものが これからの惑星研究の大きな課題となっていくであろう。

そして こうした比較惑星学的研究が 太陽系の起源のなぞを いっそう明らかにしていくにちがいない。しかも 私たちの地球のなぞも 惑星の研究からその解決の糸口がみつかるかもしれない。地球上の研究だけからではわからなかったことが 宇宙的視野での 外からのアプローチによって解けてくることは きっとあるだろう。火星の地質学は そのような意味でも 月に



第6図 アントニアジの画いた美しい火星スケッチは いまでも夢をさそう

ついで 宇宙地質学発展の礎石となるものである。

おわりに いろいろとお世話になった地質調査所の方がたに 厚くお礼申しあげるしだいである。(おわり)

(筆者は 東京都立武蔵高校教諭)

地学と切手



第20回 国際地質学会議 記念切手

P. Q.

第20回国際地質学会議は 1956年9月4日～11日の間 メキシコシティで2,100名が集って開かれた。日本からの出席者は 坪井誠太郎 遠藤隆次 松本達郎 兼子勝 佐々保雄 花井哲郎 西原寛治などが参加した。米国 カナダ 中南米からの出席者が多く盛大だった。記念切手は9月4日にパルクチン火山を画いたもの1種が発行された。

パルクチン火山の誕生は 火山の誕生が科学的に観察された珍しい例のひとつである。1943年2月20日メキシコのミコアカン州パルクチン村のとうもろこし畑の中に火山が生れた。昭和新山の誕生にわずか先立っている。それは戦争中ではあったが世界各地に伝えられて話題となった。

2月20日に先立つ2週間の間地震が感じられ それが次第に頻度が増して 2月19日には300に達した。2月20日の午後パラングリクチロの農夫が耕していた畑に割れ目が開き 30分

位たつと直径1フィートの火口から灰色の煙が立ち上った。煙は次第に激しくなり 火花と高温の石が放り出され 夜になると電光と音をともなった爆発する円柱が火口から現われはじめた。翌朝になるとそこには高さ120フィートの火山錐が築かれていた。爆発は間断なく激しく続き ストロンボリ型の爆発となり 火山弾は1～2マイルの高さに及んだ。

2月22日には北側の割れ目から熔岩が出て来 火口からは依然として噴煙の立ち上る爆発がつづいた。それから10月まで主に抛出物による山体形成の活動がつづいたが それからは熔岩の流出が主になり 1944年4月には火山灰と岩滓の下に埋ったパルクチン村の上に拡がり 6月には6kmはなれたパラングリクチロの村が30フィートの熔岩の流れの下にうまり ただ教会の先端だけがアア熔岩のブロックの上につき出していた。それから数年の間活動を つづけたが 全体としては次第におさまって行き 1952年2月に火山は活動をやめた。最後にはもとのとうもろこし畑から450mの高さになったが そのうち300mは火山灰と熔岩の台地 岩滓丘の比高は約150mである。

この火山は F. M. BULLARD によってくわしく研究された。9年の噴火の間に噴出物は次第に分化を示し 初期の SiO₂ 55%の橄欖石含有玄武岩質安山岩から末期の SiO₂ 60%の紫蘇輝石安山岩へと変化した。噴出物の総量は 2km³(約36億t)でうち熔岩は0.7km³である。

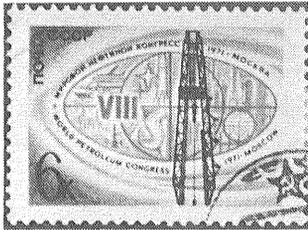
これまでに述べたことからこの国の鉱産資源の開発がまだその緒についたばかりであることは理解できよう。次号では引き続きサウジアラビアでの鉱物資源探査がどのように進められているか また今後どのような方向に重点をおいて進められるかという点について紹介する予定である。
(筆者は 鉱床部)

文 献

BROWN, G. F. & JACKSON, R. O. (1961): The Arabian shield, Precambrian stratigraphy and correlation, IGC Symp. p. 69—77.
 DGMR (1965): Mineral Resources of Saudi Arabia, DGMR Bull. No. 1, 72p.

DGMR (1969): Mineral Resources Research 1967—68, 111 p.
 DGMR (1970): Mineral Resources Research 1968—69, 209 p.
 DGMR (1971): Mineral Resources Research 1969—70, 35 p.
 小村幸二郎(1968 a): アラビア半島の生い立ち 地質ニュース No. 165, p. 46—53.
 小村幸二郎(1968 b): サウジアラビアの地下資源 地質ニュース No. 167, p. 41—55.
 POWERS, R. W. and others (1966): Sedimental Geology of Saudi Arabia, USGS Prof. Pap. 560-D, 147 p.
 SCHMIDT, D. L. and others (1971): Stratigraphy and tectonism of the Southern Part of the precambrian Shield of Saudi Arabia, USGS Saudi Arabia Proj. Rep. No. 139, 36p.

地学と切手



第 8 回
世界石油会議

P. Q.

世界石油会議

第8回は 前回メキシコにおけるのに 引き継いで 1971年6月13日～19日モスクワにおいて行なわれた。参加者は世界71カ国から約5,600人 日本からは約200人であり その職種別内わけは 地質学者と地球物理学者 19.8% 生産技術者23.2% 精製および石油化学部門に従事する者 36.8% 工業技術者 5.7% 経済学者・統計専門家・経営者8.0% その他6.5%である。

世界石油会議は「人類福祉のための石油」をスローガンとして 石油の探査から利用に至るまでのあらゆる側面について 科学的検討を加えるために 4年に1度開かれる会議である。

13日の開会式は クレムリン大宮殿において コスイギン首相のメッセージが代読され 14日からは会場をロシアホテルに移して学術発表が行なわれた。その後の学術発表および討論は 3つに分けられた。

第1はレビューペーパーで概括的な報告15編である。主催国ソ連は特別な待遇で次の3編が割りあてられた。

- 石油業相シャーション：ソ連の石油産業
- 石油精製・石油化学工業相フェドロフ：ソ連の精製と石油工業における技術的進歩
- 地質相セモノビッチ・石油工業相：ソ連の新石油ガス地域とその探査

第2はパネル討議であって 25の部門に140の論文が提出発表された。メキシコ大会の時は42部門にきわめて多数の論文が提出されたが 今回は内容を精選する主旨で厳重に制限された。日本からの論文提出は10編であるが アメリカ43 フランス17 イギリス15 ソ連13 西ドイツ11 オランダ10 カナダ7が主だった国である。

第3として最近の重要な事項についての特別報告10編が提出された。これは4年に1度開かれると準備に長時間かかるため 最近の問題に触れられない欠点を補うためである。

以上を通じて日本からは座長が2人 副座長が1人選出されている。

会議後の見学旅行は15コースにわたって行なわれた。常任理事会では次回の1975年大会を東京において開催することが承認されるとともに会長は アメリカ 副会長は ソ連 フランス ベネズエラ イギリスから選ばれた。前副会長の藤岡信吾氏は「次回の開催国に対してあらゆる榮譽が与えられるので 副会長の立候補は辞退する」の習慣に従った。

6,000人にも上る参加者を収容して開催できる都市は世界でも数少ないことだろう。それにもまして言語習慣の枠を乗り越えて円滑な意志疎通を進めることは至難の業である。ソ連における今回の大会でも 主催者側の最大の善意は認められるにしても 日本流にかゆい所に手がとどく運営には至らなかったきらいがなきにしもあらずだったらしい。石油問題が曲り角にきている今日 日本側関係者の進めている努力に敬意を払うとともに 第9回東京大会が一層実り多いことを願うものである。切手は1971年6月9日発行された。